

オランダのピューリタンⅡ

田 江 安 廣

(1998年10月1日 受理)

I 契 機

ウィリアム・ブラッドフォード William Bradford (1589~1657) は今日ピルグリム・ファーザーズと呼ばれる一行の行動記録を *Of Plymouth Plantation* (初版 Dean Edition 1856年出版) として著わし、その序のなかで “And first of the occasion and inducements thereunto; the which, that I may truly unfold, I must begin at the very root and rise of the same. The which I shall endeavour to manifest in a plain style with a singular regard unto the simple truth in all things; at least near as my slender judgement can attain the same.”¹⁾ と述べている。そもそもの事の発端に遡り、貧弱な判断力ながら、あらゆる事柄に含まれる真実に留意しつつ、それを平易な文体で著わそうと云うのである。ここでブラッドフォードのいう事のおこりとは分離派 separatist と呼ばれる彼らとその主張、宗教上の信条故に本國英国で弾圧を受け、オランダに逃れざるを得なかった事情を指している。分離派の名は「コリント人への第二の手紙」第6章17節にある “Come out from among them, and be ye separate, saith the Lord, and touch not the unclean thing.” に由来するが、彼ら分離派のイギリス国教会からのラディカルな離反は王権、臣下としての服従の否定、身分階級社会に対する反逆を含意し、その必然的帰結は故国を捨て放浪者となり故国喪失者となるか、死を覚悟して故国にとどまるかであった。彼らの信仰の自由への要請は既成の教会の儀式、規律、組織への不満、反発、嫌悪としてあらわれ、それは布教の自由、言論、出版の自由へと拡大してゆく。ここに我々は思想及び良心の自由という最も根源的な法命題を見いだす。²⁾

故国に見切りをつけた彼らを選んだ場所はオランダだった。彼らが「低地地方に移住することを全会一致で決意した」のは、そこには「すべての人に信教の自由があると聞いていた」からである。“by joint consent they resolved to go into the Low Countries, where they heard was freedom of religion for all men.” (p.10)

しかしオランダに渡るには法外な料金を船乗りたちに支払わねばならなかった。国外に出るには許可状が必要であり、ローマ・カトリックや非国教徒 dissenter にはそれが与えられなかったため、彼らは密航を余儀なくされたからである。その上、彼らは裏切られることが多かった。ピルグリムの計画はほとんどいつもうまく運ばなかったといってよい。ここでブラッドフォードはオラン

ダ渡航に伴った苦難を比較的詳しく述べている。

最初の企ては1607年ボストンに集まりウォッシュ湾（ノーフォークとリンカーンシャーの間にある北海の入江）から出発することであった。しかし約束の時間になっても船は姿を見せず、一行を苛立たせ、待たせた挙げ句、やっと姿をみせたものの、乗客たちから船賃を受け取るや船主は彼らを官憲に売り渡した。彼らはボストンに引き立てられ「人々の見世物」となり、牢に入れられる。

“..made them a spectacle and wonder to the multitude which came flocking on all sides to behold them.” (p.12) 使者がロンドンに立てられたが、当局は一行が疲れきっており、無名の者が多かったため一行の指導者リチャード・クリフトン Richard Clyfton (1553-1616)、ジョン・ロビンソン John Robynson (1576-1625)、ウィリアム・ブルースター William Brewster (1560'-1643) らを除き、皆を釈放した。しかしブルースターらも後に釈放された。

この失敗に懲りて渡航に加わらない者もあらわれたが大半はまだオランダ行きを諦めなかった。1608年2度目の企てが実行に移された。前回の失敗の教訓から集団で移動するのでなく男たちは数名ずつ別々にハルトとグレート・グリムズビーの中間の、町から離れた寂しい場所で落ち合う手筈が整えられた。女性、子供、荷物は別に帆船で出発し、集合地に現れた。しかし船が岸に接近したとき強風のため女性たちは船酔いし、船を入江に停泊するよう懇願した。運悪く船は浅瀬に乗り上げ、オランダ人の船長が1～2マイル沖に一行を運ぶ予定の船の錨をおろした翌朝も浅瀬から逃れられないでいた。男たちは既に到着していたが沼と深い海峡に阻まれて女性、子供たちに近づけなかった。満ち潮になれば帆船は動きがとれるとなると判断した船長は船に乗り込むように男たちに合図した。およそ半数が乗船したとき銃を持った群集が海岸にやってくるのを見ると、船長は自国の言葉で“sacrament”と叫ぶや、錨を挙げて出発してしまった。後に残されたものは岸に残された男たち、乗船していた男たち、帆船の女性、子供たちの悲痛な叫び声だった。

乗船していた男たちを待ち受けていたのは嵐と2週間の漂流だった。通常であれば1～2日の航海が2週間も要したのは船がノルウエー沖にまで流されていたからである。彼らはアムステルダムに到着した。しかしほとんどの者はポケットには1ペニーもなく心は故国の家族への想いで重かった。一方、英国に残された人々は捕えられ、町から町へたらいまわしにされた挙げ句、釈放された。役人たちは多くの女性、罪のない子供たちをどう扱ってよいか分からなかったのである。

二度にわたる失敗のためオランダへの渡航を諦めるものも現れたが、未だ諦めと無縁の者もいた。何としてもオランダに行こうとする彼らの決心は翻らなかつた。今度、彼らが取った方法は多数で渡航するのでなく、小人数で海を渡ることだった。こうして1608年頃までに異郷での生活を望んだ一行は「ある時期、ある場所に、またある時期、別の場所に」到着し、「うれしいことに、彼らの望みどおりアムステルダムで再会」を果たした。(p.15)

ここで当時英国からオランダへ移住した人々の職種に目を転じてみよう。キース・スプランガーによれば英国からヨーロッパ大陸への移住は1650年頃まで新大陸移住と同数、あるいはそれを上回っていた。³⁾「ニュー・イングランドをとるべきか、オランダをとるべきか」迷った末に、避難

の場としてオランダをを選んだ人も少なくなかったのである。その逆にカトリック・スペインの怒りから逃れるためにオランダから英国のロンドン、ノリッジ、ヤーマス、サウザンプトン、カンタベリーへ逃れるプロテスタントもいた。低地地方のフラマン人の英国移住は新しい織物技術を英国にもたらすことになった。当時英国からオランダに渡航した人々の職種のなかで多いのが兵士であった。1568年に勃発し、断続的に80年間続いた対スペインとの戦いはつとに知られているが1585年のノンサッチ協定によってエリザベス女王はオランダを援助すべく兵士を送り込んだ。ライデン市の記録にも兵士の名前が見られるが彼らが駐屯した場所はおもにプリシンゲン、ブリルなどであった。ピルグリムの新大陸渡航に加わりプリマス植民地の建設に多大の貢献をしたマイルズ・スタンディッシュ Myles Standish (1584-1656) は1604年まで続いたオステンド包囲の際、英国軍兵士として加わった。5年後、オランダとスペインはアントワープの休戦に署名するが、英国人兵士は1616年までオランダに留まっていた。⁴⁾ スペインに対峙すべくオランダに送り込まれた兵士は1585年以来5,000人から6,000人、1621年までに送り込まれた英国の4個連隊とスコットランドの2個連隊の総数は13,000人であった。

第二はオランダの諸都市に教会というコミュニティーを形成する英国人である。プリシンゲン(フラシグ)では1619年に128、ライデンでは1609年に200、ユトレヒトでは1623年までに120、デルフトでは1636年に70の所帯が居住許可を求めた。アムステルダムでは1623年までに、ある一つの教会員数は450に達していた。英国と何らかの取引のあるオランダ都市には必ずといっていいほど彼らの“Engelse kerk, Engelse huis, Engelse kaai”が見うけられ、ハーリンゲンの売春宿にすら英国人のしるしが確認されたのである。

軍人、非国教徒のほかにもオランダに渡った英国人は営利を目的とした商人、労働者、学生である。英国と大陸の取引は冒険商人に掌握されていたがほかにもオランダでひともうけをしようとして渡航する商人や職人がいた。彼らは「信仰の自由」の名目もとにオランダに渡った。

1590年から1659年までのアムステルダム、ライデンの「新市民」の出身地(出身国)がどのようなものであるかはジョナサン・イスラエルの *The Dutch Republic* にみることができる。⁵⁾

イスラエルの依拠したポスチュマス Posthumus によれば1590/4までのアムステルダムの新市民は(1)オランダ諸州 51% (2)ザイトホルント 36% (3)ドイツ11% (4)英国 1% ライデンでは(1)ザイトホルント 80% (2)オランダ諸州 15% (3)ドイツ 3% (4)英国 1.5%となっている。1655年/9には英国からの市民がアムステルダムでは7%、ライデンでは3%に増加している。1575年から1620年の間に英国とスコットランドからライデンの市民となった人数はそれぞれ126名、18名である。⁶⁾ イスラエルは上述の書のなかでオランダ社会の変貌を反乱の初期すなはち1572年以降の混乱と分裂による一期、および1590年以降の商取引の繁栄、産業の勃興、インドシナとの交易の成功によって特徴づけられる第二期に分類している。⁷⁾

イスラエルによればオランダ社会のいかなる側面も第一期の分裂と第二期の経済の奇蹟によって多大の影響を受けざるは無しとするのである。1590年以降のオランダの商取引制度の再構成の最も

劇的なあらわれがオランダの都市の爆発的發展である。イスラエルの挙げたホラントとジールントの1570年から1647年までの人口増加表によれば(ちなみにピルグリム・ファーザーズがオランダに滞在した時期は1608-1620である)アムステルダムの人口は1570年30,000人, 1600年60,000人, 1622年105,000人, 1632年116,000人, 1647年140,000人と増加し, 第二の都市ライデンも1570年15,000人, 1600年26,000人, 1622年44,500人, 1632年54,000人, 1647年60,000と同じく増加している。

当時は高い乳児死亡率と疫病のため死亡率が出生率を上回っていたことから都市の人口の増加は移民によるものと推測される。ライデンでは1599年, 1604年, 1624年, 1636年に疫病で多くの市民が命を奪われ, アムステルダムでも1602年に1万人の死者, おそらく人口の15%を失ったとイスラエルは推測している。ピルグリムの指導者ロビンソンは1625年ライデンで亡くなったが, ブラッドフォードの描写から察するに疫病が原因だと考えられる。いずれにせよ, アムステルダム, ライデンの人口増加にピルグリム一行も貢献したことになる。

II アムステルダム

英国のスクルービーからのアムステルダム移住者は全員でおよそ125名, その中にクリフトン, ロビンソン, ブルースター, ブラッドフォードらが含まれていた。彼らがオランダで目にしたものは「武装した多くの隊によって堅固に防衛された立派な都市」「ありとあらゆる富の豊かさに溢れる麗しく美しい町」であり, そこで耳にしたものは「聞き慣れぬ異様な言葉」(p. 16)だった。彼らのほとんどは英国の田舎の出身でありアムステルダムは活気に溢れる大都市だった。一行がカルチャー・ショックをうけたのも驚くにあたらない。アムステルダムは数か国語が飛びかい, さまざまな人々が集まる新世界だった。

やっとの思いでアムステルダムに到着した一行だったが翌年1609年には早くもアムステルダムをあとにする。その主たる理由はアムステルダムにおける他の教会員相互の争いだった。「ジョン・スミスとその同胞とが以前からそこにあった教会となぜ争うようになったかを知り, 彼らのなしうるいかなる手段もかれらを矯正する役には立たぬだろうことと, また古い教会自体のなかにも(遺憾ながらあとで事実そうなったのだが)争いの焰が燃え上がろうとしていることを思慮深くも予見して, 何かのことで彼らと関り合いにならぬうちに移住するにしくはないと考えた」のである。(pp. 16-17)

一行がアムステルダムに到着する以前にすでにジョン・スミスと彼のグループ70~80名と the Ancient Brethren と呼ばれるさらに大きな300名のグループがアムステルダムに居住していた。スミス一行もブラッドフォード一行も磁石に吸い寄せられるようにこの大きなグループに引きつけられたが, やがてスミス一行が彼らの一派を形成する。分離派は名の示すごとく何事につけ, 論争的, 戦闘的, 排他的で妥協を知らない体質を有していたが, そのなかで唯一, ピルグリムの一行だ

けが指導者ロビンソンの並外れた指導力、洞察力のおかげで争いにまきこまれることを免れた。彼らは「火口に座っている」ことに気づいたのである。⁸⁾

Ⅲ ライデン

一行は1609年ライデンに移住する。アムステルダムまで行動を共にしたクリフトンは the Ancient Bretheren のもとに留まり、ライデンへの移住には加わらなかった。彼はこのため信頼を失い、生涯、悔いを残すことになる。

一行が何故ライデンを選んだのか定かではない。ライデン移住の否定的要因 (push) をアムステルダムでの内紛とすれば、積極的要因 (pull) をライデン大学の存在と推測することが可能である。ライデンについてブラッドフォードは「そこはきれいな町で、快い位置を占めていたが、それを飾る大学でいっそう有名にされていた。その大学には最近までたくさんの学者がいたのであった」(p. 17) と述べている。フリードリヒ・ヘールはヨーロッパの大学を「ヨーロッパが世界にもたらした持参金」と呼んだが⁹⁾、その「持参金」の一つであるライデン大学はピルグリム一行がライデンに移住する34年前、すなわち1575年に創立され、近代古典学の創始者スカリゲルをはじめ、リブシウス、ドドネヤスなどを迎えていた。¹⁰⁾ ブラッドフォードのいう学者にスカリゲルが含まれていたのは間違いないと思われるが、またアルミニウス (1560-1609) も彼らの移住直前まで存命であった。

ライデンについてブラッドフォードが繰り返し美しい町と呼んでいるのは興味深いだが、彼らがライデンにひかれたのは、町の美しさよりも彼らの指導者である学究的ロビンソンやブルースター、ブラッドフォードがケンブリッジ大学の出身であることから、大学に魅力を感じたためだと考えられる。事実、ロビンソンは1615年大学の神学部の名を連ねることになるのである。いずれにせよ、一行は1609年2月12日にライデン市当局に移住許可を求め、受け入れられる。以下が、その申請書と許可を記したものである。¹¹⁾

APPEAL OF THE PILGRIMS FOR PERMISSION TO RESIDE AT LEIDEN

Gemeentearchief Leiden

Gerechtsdagboek

12.2.1609. Versouck van wegen 100 personen in Engelandt gebooren om haer residentie ter Stede te mogen nemen.

Aen myn Eer: Heeren myne Heeren Burggemeesteren ende Gerechte der Stadt Leyden
Geven mit behoor (icke) eerbiedinge onderdanicheden te kennen Jan Rabarthsens,

Dienaer des Goddelickes Woorts, mitsgaders eenige van de gemeente der Christelicke gereformmeerde religie, geboren inden Coninck Rycke van groot Bretanien, ter nombre van hondert persoonen of daeromtrent, zoo manspersoonen als vrouwen, hoe sy wel vander intentie syn souden hen eersdaechs, emmers tegen Meye eerstcoomende metter woonste te begeven binnen deser Stadt, ende de vrydom van dien omme hen te beneeren met verscheyden haer (uyder) hanttwercken ende neeringen, zonder nochtans int minste yemant te bezwaren. Soo est dat sy vertoonders hen syn keerende aen uwe Eer : Biddende zeer instantel (ick) dat uwe Eer : believe hen te vergonnenvrye ende lybre consent omme hen als vooren te begeven. Dit doende enz. In mergine stont geapostillert, Die van de Gerechte disponeerende opt jegenwoordige versouck verclaren dat sygeen eerlicke persoonen weygeren vrye ende lybre incompst omme binnen deser stede te mogen comen ende haer woonplaets te nemen, mits hen eerlicken gedragende ende sich onderwerpende alle keuren ende ordonnatien alhier, ende dato-versulcx der thoonderen bycompst alhier hen lieff ende aengenaem wert syn.

Aldus gedaen in haer vergaderinge opt' Raethuys desen XIIen February XVIc negen.

Onder stont

My jegenwoordich ende geteyckent

J. van Hout

申請書の内容はジョン・ロビンソンおよび英国に生を受けた彼のメンバー100人余の男女が来たる5月1日にライデンに移住するにあたり、商売と生計を営むための自由を要請するというもので、余白には移住者が法を遵守し、その行動に問題がない限り、市は正直な人々の居住を拒むものではないと記されている。¹²⁾ 署名人は著名なハウトである。彼らの移住にさいして特に記憶されるべきは、一行の引き渡しを要求し、居住をを阻もうと英国の大使から市に対して圧力がかけられたときライデン市がこれを無視してロビンソン一行の居住を許したということである。以下がライデン市の返答である。少し長いがこれも原文から全文引用する。¹³⁾

REFUSAL BY THE LEYDEN AUTHORITIES OF EXTRADITION OF
THE PILGRIMS DEMANDED BY THE BRITISH AMBASSADOR

Gemeentearchief Leiden

Missivenbock C. fol. 126 r.v.

Eersame, wyse, voorsienige, discrete

Jan Jansz Baersdorp, Raet int Collegie

van de Gecommitteerde Raden van de Staten

van Hollant.

Eersame, wyse, voorsienige, discrete Medebroeder,

Wij hebben uwer E. missive van den XXIIen deser uyten Hage ontfangen ende den inhouden van dien verstaen, vougen daerop voor antwoord, dat wij achten den E. heer Wynwod, Ambassadeur van syn Ma (jesty) van groot Bretaingnien t'onrecht te wesen aengedient als dat bij ons eenich accord met zommige Brunisten soude wesenaengegaen: dan is waer dat aen ons in Februario lestleden Requeste is gepresenteert opten naem van Jan Rabarts, Dienaer des godlycken Woordts, mitsgaders eenige van de gemeente der Christelycke gerefo rmeerde Religie, geboren in Engelandt, versouckende dat alzoo zyluyden van meninge waren binnen de stadt Leyden metter woon te comen, men hen daertoe wilde verleenen vry ende lybre consent. Daerop by ons voor Apostille is verclaert, dat wy geen eerlicke personen weygerden vrye ende lybre incompst mits hen eerlyck gedragende, ende sich onderwerpene alle keuren ende ordonnantien alhier, ende dat oversulcx der thoonder bycompst ons lieff ende aengenaem soude zyn gelck can gesien werden uyte Requeste ende bygevouchde Apostille daervan wy uwer E. copie seynden, sonder dat yets anders by ons vorderdiesaengaende gedaen is, ofte sonder dat wy oyt hebben geweten ofte alsoch weten, dat de supplianten uyt Engelandt gebannen ofte van de secte der Bruynisten syn souden. Derhalven Uwen E versouckende dezen alsooc de bygevouchde copie metten Heer Advocaet te communiceren ten eynde op ons geen quaet genougen off by de Heeren Ambassadeurs off syne Ma(jesty)t werde genomen ende wy by haer E. ende consequentlyck by syn Ma(jesty) mogen gen excuseert syn. Hiermede ennz.

英国大使ウインウッドにあてたこの手紙で、ライデンは英国のブラウニストに対してライデン市が同情的であるという批判は誤解であると弁護した上で、ジョン・ロビンソン一行から居住許可の依頼があったことが事実であること、それに対して法を遵守し、問題なき振舞をする限り、いかなる正直な市民も拒絶するものではないと返答したことを明らかにする。次いで一行が英国から追放された人々であること、あるいはブラウニストに属していたことは与り知らぬことであつたとして、大使、国王の理解と容赦をを賜りたいと願うものである。ライデンのこのような勇気ある行為は「外交史の文献にもまれにしか見られない」¹⁴⁾ 行為として記憶されてよい。

ロビンソン一行がライデンに移住した時期はオランダとスペインの休戦時期にあつてた。休戦はかれらにとって少なからぬ精神的慰安をもたらした。また忘れてならないのはこの時期がアルミニウス論争の時期にあつてたことである。彼らの移住前にアルミニウスは世を去っていたが

論争は未だ続いていた。ブラッドフォードは「学校（大学）では毎日のように激しい議論が行われていた」（p.20）と述べている。神学者ロビンソンにとってこの論争はひとつでなく、彼は大学に双方の主張を聞きに出かけた。やがてロビンソンの存在はアルミニウス派にとって脅威と感じられるようになった。反アルミニウス派のポリアンダーはロビンソンに彼らの側に立つことを要請したがロビンソンはよそ者であることを理由に断った。しかし繰り返し要請を受け「相手方のしたたかさと能力は侮りがたく、ために真理が危うくされるかもしれぬ」と言われ、ついに承諾した。討論の日、「主は真理を守るため彼の側にお立ちになり」ロビンソンは論敵を聴衆の前で「窮地に陥らせた」。(the Lord did do help him to defend the truth, and foil this adversary, as he put him to an apparent non plus, in this great and public audience.) (p.21)

このようにしてロビンソンは二度、三度と機会あるごとに論敵の主張を封じ込め名誉と尊敬を勝ち取ったとブラッドフォードは誇らしげに述べている。エドワード・アーバーはビルグリの残した資料は貴重ではあるが、それは外部資料によって修正され、またつけ加えられねばならないと述べたが、¹⁵⁾ ロビンソンのライデン大学での論争に加わった記録が教会史の資料に残っていないことからブラッドフォードの叙述を外部資料によって確認することは残念ながら出来ない。¹⁶⁾

その著『ヨーロッパ大全』でヨーロッパにおけるプロテスタンティズムの度合いをローマからの距離、識字率、家族制度の三つの要因によって明快に分析、説明したエマヌエル・トッドはアルミニウス主義の受容の原因を聖職者権力への異議申し立てに有利な地上的条件（識字率とローマからの距離）および絶対核家族（自由主義的親子関係、非平等の兄弟関係）に見いだしている。アルミニウス主義はこののち、神の権威についての自由主義的ビジョンと聖職者の権威についての自由主義的ビジョンを併せ持ち、いかなる超越的権威も退ける「ヨーロッパで最も柔軟な宗教体系として姿を明確にする」ことになる。¹⁷⁾

1578年から1640年までライデン大学で学んだ英国人、スコットランド人、アイルランド人の姓名、数、年齢、登録年、専攻はタメルの編んだ*The Pilgrims and Other People from the British Isles in Leiden 1576-1640*によって知ることが出来る。¹⁸⁾

1578年から1640年までに大学に登録された英国人の数は367名、最低入学年齢12歳（2名）最高入学年齢60歳。Artium Liberatum (Arts), Arithmeticae (Arithmetic), Historioe Studiosus (History), Medecinae Studiosus (Medecine), Theologiae Studiosus (Theology), Philosophiae Studiosus (Philosophy), Politices Studiosus (Political Science) など19項目の専攻のうち最も専攻の多い順に医学、文学、神学、哲学である。このなかで注目すべき人物は27歳で1617年1月14日に神学専攻に登録したヒューゴ・グッドイヤー Hugo Goodyear, 1615年39歳で9月5日に同じく神学専攻に登録したジョン・ロビンソン（彼の息子ジョンは1622年4月12日、17歳で芸術専攻で登録し、父の死後ジェイコブは1631年5月13日、文学専攻で登録している）、1615年2月17日、35歳で文学専攻に登録したトマス・ブルアー Thomas Brewer (1617-1661) である。¹⁹⁾

ロビンソン一行がライデンに到着したとき、既に the English Reformed Church が存在してい

た。そのグループの数は200家族（1609）で、ロバート・デューリー、その後継者がグッドイヤーだった。ライデンに到着したグッドイヤーは他の二名のライデン大学の学生と共にブルーワーの所に住んだ。ロビンソンの住んだ場所から離れていないこともありロビンソンと親交があった。ロビンソンの人柄もあって、二つの教会は軋轢をおこすことはなかった。²⁰⁾

グッドイヤーは1590年ころランカスターに生まれた。のちケンブリッジで1612/13に B. A. を取得し、1616年に M. A. の学位を取得する。その後、ライデンで the Reformed Church の牧師をつとめることになるのである。グッドイヤーは規律に厳しかったため教会内に軋みがよく生じた。1638年、ヘンリー・スタフォードという床屋（医師）が安息日にかからわず店を開き、説教の行われる前に貧しい人の髪を刈ってやったとき、戒律に厳しいグッドイヤーは以降、スタフォードの教会出席を禁じた。これに不満を抱いたスタフォードはオランダ教会での礼拝を希望し、願いは聞き入れられたがグッドイヤーはこれも許さなかった。この件が未だ解決を見ぬうちに別の教会員ニコラス・アレンもグッドイヤーに教会の礼拝を差し止められた。彼がオランダ人の説教を聞きに別の教会に数度出かけたのが理由である。後にスタフォードの娘も、本人の申し立てによればいやがらせを受けたためオランダ教会への移籍を希望し、ついに市当局が解決に乗り出す騒ぎとなった。一時的にイギリスとオランダ教会の融和は成立したが、これは永続的なものとはならなかった。グッドイヤーの死後、教会は再び孤立しがちになる。しかし教会は1807年まで存続した。²¹⁾

グッドイヤーは当時のオランダ、英国、アメリカの非国教徒とつながりを持っていた点で重要である。グッドイヤーと親交のあったジョン・コットン John Cotton (1584-1652) はグッドイヤーと同じくケンブリッジの出身で、その信念のため職を辞したが、彼の才能を惜しむ人の計らいで復職した。しかしロード卿の召還を恐れて、ロンドンからアメリカのボストンに渡り、植民地で重鎮となる。コットンは当時としては英国人にして最初のヘブル語の学者の一人であった。

1609年ライデンに移住したロビンソンはピーターズ教会のそばのフルーネ・ポルト Groene Poort と呼ばれるところに家を買ひ、礼拝を行った。教会員は100人ほどであったが1620年には300人に増加していた。ライデンでの一行の暮らしは質素な、落ち着いたものだった。当時の彼らに関する記録が多く残っていないのはスキャンダルが少なかったからだとも考えることもできる。事実ライデンの当事者は彼らの振舞を称えているのである。ブラッドフォードは「これら英国人は我々のなかに12年暮らしたが、彼らに対する訴訟、非難は一切、見当たらなかった」(pp. 19-20) とライデンの人々のピルグリム観を描写する。1615年ロビンソンは大学の神学部に身をおくがポリアンダー、ホミヌス Festus Hominus は彼の知人となった。²²⁾

ロビンソンの初期の立場は峻厳な分離派の特徴を備えていたがオランダ滞在が長くなるにつれ、それが和らいでいったことはよく云々される。スプランガーは現代人の目から見たとき、ロビンソンこそ最も理性的な分離派であると評している。そのあらわれを例えば、アムステルダムの教会で礼拝許可をもとめながら、それを拒絶された人物をロビンソンが自分の教会に受け入れた行為に見ることが出来る。彼はグッドイヤーと異なり、旅行中の教会員がオランダ教会に出席することも許

した。彼の葬儀にはオランダ人の教授、牧師たちも参列した。「そのなかの幾人かは悲しげにキリストのあらゆる教会は福音の尊い使徒を彼の死によってこうむった」²³⁾と述べたことをブラッドフォードは伝えている。

ロビンソンは新大陸渡航を商人たちによって阻まれ、それを果たせぬまま1625年3月1日、ライデンで没した。埋葬は3月4日に執り行なわれ、亡骸はピーターズ教会に葬られた。現在、彼の名を冠したプラークがピーターズ教会にある。ピルグリムたちが様々な試練にもめげず、その目的を貫徹出来たのはロビンソンの並外れた指導力と高潔な人格のたまものであった。

ロビンソンの死後、残された妻ブリジット、子供たち（ノリッジ生れのジョン、ブリジット、ライデン生まれのフィアー、マーシー、アイザック、ジェイコブ）、親類、友人たちはライデンのオランダ教会の礼拝に出席した。ロビンソンのコミュニティーは1640年頃には消失する。妻ブリジットは1643年亡くなり、子供たちのうちジョンは英国にもどって結婚し、二人の子をもうけた。ブリジットは1629年ライデンでジョン・グリーンウッドと結婚し、その後1637年アムステルダムのウイリアム・リーと結婚した。1610年頃生まれたアイザックはニュー・イングランドのプリマスに移住した。マーシーは1623年3月27日、亡くなり、ピーターズ教会に葬られた。フィアーはライデンでジョン・ジェニングスと1648年結婚し、3人の子を娘もうけ、1670年に亡くなった。ジェイコブは1631年ライデン大学で学び、1638年に亡くなってピーターズ教会に葬られた。²⁴⁾

IV ピルグリムの職業

“religious refugee” だったピルグリムたちに異国オランダでの目を見張るような活躍は期待できなかった。彼らはオランダ人に影響を与えるより、影響を受けることのほうが多かったからである。ライデンで彼らが従事した職業はどのようなものだったのだろうか。ピルグリムのほとんどは英国の田舎出身である。メイフラワーで新大陸に渡った人々の出身地を見るとスクルービー地域6名、ケント3名、ロンドン6名、ケンブリジシア1名、エセックス2名、サフォーク1名、ウスターシア1名、マン島1名、ライデンで生れたもの15名（ほとんどが上記の両親を持つもの）、航海中に生れたもの1名、不明9名となっている。²⁵⁾ ロンドンを除けば、ほとんどが田舎の出身であり農業に携わるものが多かった。しかし織物の町ライデンでは生計を立てるため、多くは手工業に転じ、新たに技術を身に付けなければならなかった。タメルの表26にはピルグリムの従事した職業77の項目が挙げられており、そのうち織物関係の職業が半数弱の29を占める。ここで煩をいとわずそれを列挙すれば以下のとうりとなる。Baize-worker 2, Blanket-worker 1, Bombasine-joiner 1, Bombasine-worker 3, Chamois-dresser 1, Cloth-darner 1, Cloth-drapeer 3, Cloth-dresser 1, Cloth-weaver 1, Cloth-worker 4, Draper 2, Dresser of woven material 1, Fustian Draper 1, Fustian worker 4, Glover 3, Greindraper 2, Grein-worker 3, Hatter 4, Hot-presser 1, Linen-weaver 3, Passementer 1, Ribbon-maker 3,

Say-drapeer 3, Say-worker 25, Stocking merchant 2, Tailor 6, Twister 1, Wool-carder 2, Wool comber 11. 多い順に say-worker 25名, wool-comber 11名, tailor 6名である。織物以外で多いのが商人7名, 煙草パイプ製造者7名, 学生7名, 煙草商人4名, 印刷3名である。織物の製作は多くの工程を要したようである。それは sorting から始まり, washing → drying → shearing → greasing → combing and carding → weaving → checking → dyeing → checking → fullying → washing → drying → pressing → folding → checking による品質管理を経て完成した。²⁷⁾ ブラッドフォードは fustian-worker としてライデンで生計を立て, Marendorpse Achtegracht (現在の van der Werffstraat) に住んだ。ロビンソンの住居から歩いて直ぐである。1613年彼はドロシー・メイとライデンで婚約し, 同年12月10日アムステルダムで挙式した。その記録をみると, オースターフィールド出身, ライデン居住の fustian-worker, 年齢23歳のブラッドフォードが英国ウイスペク出身の年齢16歳のドロシー・メイとの結婚予告を, 互いに独身で, 血族でないことを証言したため, 許可するという内容である。²⁸⁾ 相互の同意のもとの誓約による結婚を市役所出の登録によって正当なものと思なす考え方はピルグリムによってアメリカに持ち込まれたと考えられている。²⁹⁾

(つづく)

注

- 1) William Bradford, *Of Plymouth Plantation, 1620-1647* (New York: Alfred Knopf, 1959), p. 3. 以下, 同書からの引用は本分中にページのみ記す。本書からの訳の一部分は『原典アメリカ史』第一巻(岩波)の優れた訳を利用した。
- 2) 小池正行『英国分離諸派の運命—良心の自由の源流』木鐸社, 1993
- 3) 以下, 次の書による。Keith Sprunger, *Dutch Puritanism* (Leiden: E. J. Brill, 1982) pp. 3-6
- 4) J. W. Tammel ed., *The Pilgrims and Other People from the British Isles in Leiden 1576-1640* (Isle of Man: The Mansk-Svenska Publishing Co. Ltd, 1989), p. 12.
- 5) Jonathan Israel, *The Dutch Republic* (Oxford: Clarendon Press, 1995), p. 330.
- 6) Sprunger, p. 124.
- 7) Israel, pp. 328-329.
- 8) G. F. Willison, *Saints and Strangers* (Orleans: Panassus Imprints Inc., 1971), p. 16.
- 9) フリードリッヒ・ヘール『われらのヨーロッパ』杉浦健之訳, 法政大学出版局, 1991, p. 356.
- 10) J. J. Woltjier, "Introduction" in Th. H. Lunsingh Scheurleer and G. H. M. Posthumus Meyjes eds., *Leiden University in the Seventeenth Century: An Exchange of Learning* (Leiden: Universitair Press Leiden / E. J. Brill, 1975)
- 11) D. Plooi and J. Rendel Harris, *Leiden Documents Relating to the Pilgrim Fathers* (Leiden: E. J. Brill, 1920) I
- 12) Plooi and Harris,
- 13) Ibid. II, V
- 14) Plooi and Harris, "Introduction" to *Leiden Documents*
- 15) Edward Arber, *The Stories of the Pilgrim Fathers, 1606-1623, As told by Themselves, their Friends, and their Enemies* (Boston: Houghton Mifflin & Co., 1897), p. 2.
- 16) Sprunger, p. 138.
- 17) エマニュエル・トッド『新ヨーロッパ大全』石崎晴己, 東末秀雄訳 藤原書店 第一巻 p. 155, 157

- 18) Tammel ed., pp. 343-354.
- 19) Ibid., 344. 346. 349.
- 20) Sprunger, *Dutch Puritanism* p. 133.
- 21) Ibid., 126-134.
- 22) D. Plooi, *The Pilgrim Fathers from a Dutch Point of View* (New York : New York University Press, 1932), p. 52. 94.
- 23) Quoted in Walter H. Burgess, *John Robinson, Pastor of the Pilgrims* (London : Williams and Norgate, 1920), pp. 303-304.
- 24) Tammel ed., pp. 11-12.
- 25) Ibid., 297-299
- 26) Ibid., 310.
- 27) Clara von Waldthausen, "Pilgrim Fathers in Leiden" (Leiden : Stedelijk museum de Lakenhal Leiden 1995)
- 28) Plooi and Harris, LXX
- 29) Tammel ed., p. 369.